

A. マーシャルの有機的成長論における 経済騎士道と生活基準の役割

山本 堅一

I. はじめに

本稿は、マーシャルの有機的成長論の理解にとって欠かせない二つの概念、すなわち「経済騎士道(Economic Chivalry)」と「生活基準(Standard of Life)」について考察したものである。

マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)は、経済生物学を経済学者の目指すべきメッカであると述べた(Marshall 1898, 43)。だが、肝心の経済生物学の実体は今に至るまで明らかになっていない。筆者は、有機的成長論、すなわち、経済の進歩と経済主体たる人間の共進化を考慮に入れた理論が経済生物学の核になることを明らかにした(Yamamoto and Egashira 2012)。本稿は、有機的成長論を構成する概念をさらに掘り下げたものである。

マーシャルは一方で利益の獲得に対して合理的経済人の仮定を導入しながら、他方で経済騎士道のような存在の必要性を主張する。この目的合理性と価値合理性に対するマーシャルの二律背反的な概念は、有機的成長論を挟んで、ちょうど力学的経済学と経済生物学の関係と一致する。したがって、経済騎士道は経済生物学へと至る道の途上にある概念として捉えるべきだろう。

マーシャルは、経済騎士道は経済の進歩にとって、生活基準は人間の進歩にとって重要な役割を果たすものであると考えていた¹⁾。他方で道

徳的に改善された労働者による世論が、経済騎士道を育むともしていた。本稿で明らかにしたのは、この二重らせんの関係である。このような視点において行われた両者の関係についての研究はこれまでほとんど存在しなかった。また、経済騎士道自体に対しても、「理論そのものは哲学的で経済学的ではない。ただ生活基準の向上のために必要な主体的条件について厳密な倫理的限定が加えられただけである」(馬場 1961, 111)というように経済理論とは切り離されたものとして捉えられることが多かった。だが、マーシャルが一方で力学的経済学の部品として合理的経済人の仮定を置くのと対照的に、経済生物学の部品として経済騎士道を置いたと考えれば、それは単なる哲学的議論を超えた意味を持つことは明らかである。これは合理的経済人と経済騎士道の関係が、マーシャル経済学

たタームである(経済騎士道は1907年論文の方が先であるが)。その『原理』第5版は大幅な改定が加えられた版である。そしてその序文にて『原理』の完結編と位置づけていた第2巻の刊行を諦める旨を述べている。Guillebaudは第5版で加えられた多くのページには、何ら新しい観念は含まれていないと捉えているが(Guillebaud 1942, 339)、そのような見方は非常に残念である。第2巻を諦めたことと大幅な改定を行ったことの間、何らかの関連性があることは確実であろう。さらに、有機的成長に関する言及が登場するのも第5版序文からであることを考慮すると、第2巻を諦めたからこそ大幅に改定を行い、経済騎士道や生活基準という概念を有機的成長との関連で登場させたのではないかと推測しうるだろう。しかしながら、この点に関する考察は別の機会に行い、本稿では問わないものとする。

1) 生活基準も経済騎士道も『原理』第5版から登場し

においてこれまで考えられていた以上の意味を持つことを示唆している。

本稿の議論の順序は以下の通りである。次節では考察の準備として、これらの問題がこれまでどのように扱われてきたかを概観する。その上で第Ⅲ節では、経済騎士道を考察する。マーシャルは基本的に労働者の貧困問題の解決には教育が必要であるとした。だが、労働者の教育のためには雇用者としての企業者の理解が必要である。マーシャルは経済騎士道を提唱し、それが企業、労働者、社会の三方にとって利益となることを示した。

第Ⅳ節では、労働者の進歩を考えるために、マーシャルが提出した概念である生活基準を解説する。マーシャルは、労働者階級は生活基準を上昇させていくことが貧困脱出へとつながっていくとした。生活基準とはマーシャルにとって人間の進歩と同等に考えられているものである。やや捉えにくい概念であるため、類似概念である安楽基準との比較を行っている。さらに、生活基準の上昇と経済騎士道の普及が相互依存的事であることを明らかにした。この点は本稿の特徴の一つとなっている。

この生活基準と経済騎士道の相互依存関係が、マーシャルの経済生物学、有機的成長論の理論的骨格となっている。第Ⅴ節では、これまで曖昧なままであった経済生物学を、力学的経済学との対称関係の中で明らかにする。

Ⅱ. これまでの「経済的騎士道」と「生活基準」の解釈について

本稿の研究の特徴を明確にするために、マーシャルの経済騎士道がこれまでどのように捉えられてきたのかを確認しておこう。日本において、経済騎士道の解釈は、『経済学原理』（以下『原理』と略記）の訳者である馬場に代表される。馬場は、経済騎士道とは「資本企業者が経済活動において誇示の欲求をすて、ひたすら優越への欲求に生きるような態度」（馬場 1961, 110-

111)のことであるとする。研究者によって多少の差はあるものの、ここで引用した「優越への欲求(the desire for excellence /以降は「卓越性への欲求」で統一する)」と「倫理的」というキーワードによる解釈が共通している。

斧田は、「経済進歩の前提条件として、したがって有機的成長論を倫理面から支える要因として経済騎士道が暗示されていた」(斧田 1971, 7)のであり、また「経済騎士道は経済活動そのものを自己目的として追求するもので」(ibid., 17)あるという。斧田の解釈は、馬場とほぼ同一である。また舩谷は「自己の利益獲得のみに関心を持つのではなく、労働階級の状況や社会の発展を視野に入れた経済倫理を身につけるべきことを企業者に求めたのであって、マーシャルはそれを『経済騎士道』と呼んだのであるが、先に述べた『欲求』との関連でいえば、それは『卓越性への欲求』を純粹に追求する態度である」(舩谷 1998, 138)として、馬場と同一解釈をとっているのである。そして西岡は、「労働者の生活基準に対応するこの『経済騎士道』は、産業進歩に果たすべき不断の企業創造と新工夫の遂行をたえず実践し、莫大な利潤に現れる『富そのもののために富を求めろ』態度を」排除する「企業者のライフスタイルなのである」とし、このような経済騎士道はマーシャルによって「経済主体の意識と意欲の問題である」と理解されていたと述べている(西岡 1997, 155-156)。

このような捉え方は経済騎士道の一側面は捉えているとしても、すべてを包括しているわけではない。冒頭でも述べたように、このような捉え方をすると、経済騎士道や有機的成長論、そして部分均衡論や合理的経済人によって構成されるマーシャル経済学が、断片的でつながりのないものになってしまう恐れがある。したがって、本稿では馬場らの捉え方を否定はしないものの、経済騎士道を有機的成長理論の一部として捉え、経済生物学への道として捉えることとする。この点については、後に議論する。だが、他方で経済騎士道によって、本当に社会主

義的理想は達成可能なのだろうか。マーシャルが経済学研究を始める前から課題としていた貧困の解決につながるのだろうか。マーシャル的な自由主義の現代におけるもっとも忠実な後継者がフリードマンらシカゴ学派であることを考えれば、単に成功した富裕層が社会還元をしたところで、馬場が指摘するような富の分配の不平等を是正するための役割を果たす議論にはならない。実際、単に企業者の活動が、雇用の創出や社会資本の蓄積によって労働者の生活条件を改善するというだけであれば、わざわざ有機的経済成長や経済生物学といった概念を持ち出す必要はないし、経済騎士道も単なる企業の社会的責任論以上のものではなくなってしまふ。

最近では、西澤(2007)が経済進歩を経済騎士道と労働者の道徳的改善から考察し、その文脈の中に有機的成長論を位置づけている。また生活基準の重要性も認識している。この立場は、本稿の筆者の立場に近い。しかし、西澤の議論自体はより包括的であり、経済騎士道と生活基準に焦点を当てたものではない。本稿の目的はこの二つの概念を掘り下げることにある。

意外なことに、以前は日本以外では経済騎士道の意味について、深く立ち入った論文は少なかった。経済騎士道は、利他主義に通ずるものである(Tullberg 1975, 111)という説明や、経済学の範囲を超えた富裕者の義務であると捉える(Levitt 1976, 432)にとどまるが多かった。このことは有機的成長論にかんする海外での研究が少ないこととも関係していたと思われる。しかし、近年では、Raffaelli (2003)や Gerbier (2006)というようにマーシャルの経済生物学の中で経済騎士道や生活基準の役割を指摘する研究は少なくない。彼ら是有機的成長論には多く言及しないものの、本稿で紹介する構造をほぼ認識していると考えられる。

本稿では、この問題もマーシャルの力学的経済学と対照しながら考えれば解決できると考えている。特にマーシャルが合理的経済人を用いて部分均衡を考えたこと、経済騎士道を有機的

成長との関係で考えることがこの問題を解く鍵となる。これを考えるためには、本稿の中のもう一つのキーワードである「生活基準」を理解する必要がある。次節では経済騎士道について考察する。

Ⅲ. 経済騎士道

1. 経済騎士道とは何か？

マーシャルは、経済騎士道という概念を思い付いたのは1880年以前であったと晩年明らかにしているが²⁾、初めてこの言葉が彼の著作に現れるのは、1907年の論文「経済騎士道の社会的可能性」であり、『原理』には改訂版第5版最終章になってから組み込まれた³⁾。1907年論文によると経済騎士道とは二つの騎士道から成っている。事業における騎士道と、富の使用における騎士道である。事業における騎士道とは、以下のように定義されている。

2) 1919年 John Hilton に送った手紙で次のように振り返っている。「私は騎士道の競争を進歩の主要因だと考えています。それゆえ私は競争が貪欲であるべきだという示唆には若干悩まされています。それが多くの活動形態にとって本質的な刺激であるという私の考えは、はるか前にラケットボールコートで現れました。私は、もし友達(対戦者)が遅れてきても、数十分の間何の不満もなく一人でボールを打つことができると発見しました。しかし、その後私は疲れ、再び元気になるのは、彼が対戦しに現れたときでしょう。私は、彼が勝とうが私が勝とうが気にしませんでした。私は対戦を楽しみましたし、それが私を良くしたと思います」(Whitaker 1996, Vol. 3, 363)。ここからは騎士道の競争というのが結果にとらわれない純粋な競争心であるということしか読み取れないが、マーシャルはこの手紙に1907年論文を同封したことからも経済騎士道との関連が想起できる。

3) 1885年のマーシャルのケンブリッジ大学経済学教授就任講演において、後の経済騎士道とはまったく関係ない文脈で一度、「騎士道的」という用語が使用されている(Marshall 1885a, 152)他、産業報酬会議で騎士道という用語を次のように使用している。「騎士道の時代は終わっていない。それは現世代の中に発達し始めている」(Marshall 1885b, 183)。

事業における騎士道は公共心を含んでいる。それは戦争における騎士道が、君主、国家、あるいは十字軍への無私な忠誠を含んでいるように。しかしそれはまた高貴で困難なことがらを、それが高貴で困難であるがゆえに行う喜びを含んでいる。…それは安直な勝利に対する軽蔑や、助けを必要としている人々を援助する喜びを含んでいる。(Marshall 1907, 330/訳 139)

経済社会では、個々人の活動が、一方では個人の欲望の発露であることを認めながら、他方で「選ばれし者の義務」を要求する。経済社会の成功者は、日頃の事業の中でも公的なものに対する奉仕を求められるのである。そして、このような事業における騎士道が富の使用における騎士道へと導かれるのである。富の使用における騎士道とは、見せびらかしの支出を避け、「まだ名前の知られていない芸術家の良い画を購入することに精力的であって、自らの死後はそれらを公衆に寄与」したり、「庭園を綺麗にして公衆に開放し、近隣の産業地区からの容易な交通手段も用意する」ことであるという (*ibid.*, 344-345/訳 157-158)。

だが、経済騎士道の担い手が産業の総帥のような成功した企業者であるとして、それでは成功した企業者であれば誰もが経済騎士道に従うようになるのだろうか。かつて貴族に生まれついた者は誰もが *noblesse oblige* を課されていたが、それを全うするには貴族としての教育が必要であった。成功者にも何らかの形で経済騎士道「教育」をすることが必要なのではないか。斧田によれば、経済騎士道が経済社会に広まるためには、「人間教育における騎士道精神の訓育」が必要であり、「マーシャル自身は経済騎士道を育成することにながりの希望と自信もっていた」という(斧田 1971, 10)。この問題を考える前に、もう少し経済騎士道の社会における位置を考察しておこう。

興味深いのは、マーシャルが経済騎士道について、社会主義、集産主義との関連で言及して

いることである。もちろん、自由市場と資本制生産の意味を誰よりも熟知したマーシャルが、資本を機能不全に陥らせる国家社会主義に反対したことはいうまでもない⁴⁾。しかし、他方で社会主義が解決を目指した貧困問題は、またマーシャルの課題でもあった。彼が自分を「経済学を知る以前から社会主義者」(Marshall 1907, 334/訳 143)とするのはこのためである。したがって、マーシャルの批判の矛先は、それは私有財産の廃止や資本の国有化という国家社会主義の方法には向けられるが、その理念自体に対してはむしろ好意的ですらあった。つまり、マーシャルが批判していたのは、そこへ向かうためにしばしば取られた性急な手段であったといえる。

そして、社会主義の理想を達成する方法として、経済の国家管理の代わりにマーシャルが提出したのが、経済騎士道であった。マーシャルは、「騎士道に基づく真の社会主義は、いかなる国においても、資本が奪われるといけないので、他の国よりも早く[社会主義へ]移行することはできないのではないか、という懸念を克服することができる」(*ibid.*, 346/訳 159, 括弧内は引用者)と指摘する。マーシャルの社会主義の評価という点ですぐに思い浮かぶのは、フェビアニズムの理想の評価とその方法の稚拙さ(理論の欠如)への批判だが、このように1907年論文の中でも同じ構造を見ることができる。

マーシャルが強調したいのは、社会主義の理念はあくまで資本主義の体制下で実現されるべ

4) マーシャルと社会主義の関係については、本稿の範囲を超えるのでここで詳細な考察は行わない。Tullberg (1975) もしくは斧田(1981)が詳細かつ示唆に富んでいるので、そちらを参照されたい。尚、当時の社会主義というタームは曖昧で多様であった。マーシャルが社会主義を問題にする際には、Tullberg も指摘するように「オーウェン、ラッサール、そしてマルクスの著作と結び付けていた」(Tullberg 1975, 76) のであり、急進的な改革をもって社会を改善しようとする意図に対するものである。

きであり、そのために経済騎士道がいかに重要かということである。「もしわれわれがこの騎士道を教育できるならば、国家は私的企業の下で繁栄するだろう」(*ibid.*)という言葉の中には、貧困問題の解決にとって経済騎士道が果たす貢献に対して彼がどれほど期待していたかということをうかがい知ることができる。

2. 経済騎士道をいかにして普及するか？

経済騎士道がどれだけ尊いものであっても、基本的に企業者は利潤追求という目的に純粋に行動する主体である。むしろ、目的合理的に行動しない企業者は競争の中で淘汰されるだろうし、もし生き残っているとしたら社会的な資源配分にゆがみが出るというのはマーシャル自身の力学的経済学の教えるところである。このような事実を知りながら、マーシャルは、どのように経済騎士道が普及すると考えるのだろうか。

さて、興味深いのは、マーシャルの次の言葉である。

もしわれわれがこの騎士道を教育できるならば、国家は私的企業の下で繁栄するだろう (*ibid.*)

先ほどの問いに対して、マーシャルはやはり経済騎士道も「教育」が必要であると考えていた。一般の労働者に対して道德教育が必要であるとするのは、プロテスタンティズムの伝統の中にしばしば見られるが、マーシャルは、資本主義の成功者である企業者に対しても道德教育が必要であると考えていたことを示唆している。これは同時に、マーシャルが成功した企業者が自発的に経済騎士になると楽観視していたわけではない、ということを示している。

しかし、成功した企業者をどのように教育すればよいのだろうか。労働者の師弟に対する教育のように学校を企業者に対しても作ることができない以上、何らかの他の方法が考えられな

ければならない。

マーシャルが経済騎士道普及にとって最も重要視したのは、名誉法廷(Court of Honour)としての世論である。成功した企業者は、衆目にさらされることになる。その企業者の行為は社会的に評価されることとなる。経済騎士道による活動を称賛し、そうでない活動は称賛しないような世論が形成されることによって、成功した企業者は社会的に「教育」されることになる。

しかし、マーシャルは、いくつかのユートピアの実験を観察した結果、通常の間人にとっては騎士道よりも嫉妬心の方がより強い力であると結論を得た(*ibid.*, 341/訳 152)。世論の大多数の担い手が労働者である以上、労働者が適切に企業者の活動を評価できないと、名誉法廷は経済騎士の誕生のために有効に働かなくなる。ところが、マーシャルは、労働者階級とは、「一日の仕事が彼の性格を野蛮で粗野なままにする傾向がある」階級(Marshall 1873, 103/訳 196-197)であると見なしていた。したがって、経済騎士道の普及は、労働者階級の道德的改善に多くを依存することになる。そして、労働者の進歩に大きく関わる概念が生活基準である。次節ではこの概念を考察する。

IV. 労働者の進歩の基礎としての生活基準

ここからは、経済騎士道と生活基準の二つの概念の関係について考察する。これまでの研究では、生活基準が人間の進歩という問題(特に労働者)にとって重要な概念であるのに対して、経済騎士道は経済の進歩(特に企業者)にとって重要な概念であるという考察にとどまるものが少なくなかった。つまり、両者は別々のものとして捉えられていたのである。また、生活基準への考察は豊富でも、経済騎士道に関する考察はそれほど多くはなく、ましてや両者の関係について述べたものはさらに少ない。ここでは両者の相互依存の関係を明らかにする。

1. 生活基準とは何か

生活基準 (standard of life) とは何か⁵⁾。マーシャルは「生活基準という用語は、欲望に合致した活動の基準」(Marshall 1961, 689/訳 IV-249)と説明している。これが単なる経済的な生活条件ではないことは次の言葉からも明らかだろう。

生活基準の上昇は、知識、活力および自尊心 (self-respect) の向上を含意し、その結果、支出における更なる思慮分別をもたらし、食欲を満たすが体力を与えないような飲食の忌避を行い、肉体的にも道徳的にも不健全な生活を退けるようになる (*ibid.*)

マーシャルは、人間の進歩の定義について直接言及したことはないが、人間の進歩の原動力として「他者に対する配慮と自尊心をより多く持つようになること」(*ibid.*, 248/訳 II-226)を挙げていることから、生活基準が人間の進歩にかかわる概念であることがわかる⁶⁾。

5) 生活水準 (standard of living) とはまったく異なる概念であることに注意が必要である。詳しくは本文の中で明らかにしていくが、この概念はマーシャルによって創り出されたものであって、それ以前の経済学者によって使われていたものではない。また、J.M. ケインズが主著『一般理論』でしばしば standard of life という用語を使用しているが、その使い方は living の方であり、マーシャルとは異なる意味で用いている (たとえば、Keynes 1936, 44, 97, 108/訳 44, 96, 107)。それゆえ、生活基準という訳語は、マーシャルの意図を十分に表すものではないと考えられる。本文でも説明するが、life という用語は living 以上のものを包含し、暮らしを超えて生命、人生という意味を持つのである。生活基準だと生活水準と区別しづらいというのも事実であろうから、「生命基準」や「生涯基準」または「生の基準」のような訳語の方が良いかもしれない。ただし本稿では慣例に倣い「生活基準」を使用した。

6) このような見解は、「生活基準の上昇は人間の肉体的・知的・道徳的向上を含む人間の進化そのものを表しており、経済的進歩が人間性の進歩を生み出し、それがさらに経済的活動を上昇させて経

ただし、生活基準の解釈に関してはさらに注意が必要である。なぜなら、文字通り生活の基準というような意味で使用されている個所もあるからである。「生活基準がその国で生活することを魅力的にする」(*ibid.*, 699/訳 IV-262) という一文 (しかもこの場合の生活基準は個人というよりも一国におけるそれとして考えられている) や、労働組合の初期の努力は「真の自主性 (self-respect) や幅広い社会の関心と調和する生活の条件を獲得しようとする努力でもあった」(*ibid.*, 703/訳 IV-267) という一文から窺うことのできる生活基準は、まさに生活の基準として使用されているといえるだろう。

また、マーシャルの著作の中には、生活基準と似たものとして「安楽基準 (standard of comfort)」という概念が登場する。マーシャルは、『産業経済学』の中で安楽基準に対して次の様に定義している。

あらゆる階級の人々が、生活の必需品、安楽品、そして贅沢品のある所与の量を享受することができるのと期待せずには結婚しようとする配慮の習慣を獲得するとき、その量はその階級の人々にとっての**安楽基準**と呼ばれる。(Marshall 1884, 28/訳 35, 強調は原著者)

マーシャルは『原理』においても安楽基準をたびたび使用している。その意味は『産業経済学』と同様で、習慣的な生活の必需品を意味している場合が多い (Marshall 1961, 174-175, 181/訳 II-131, II-139)。

安楽基準という用語はマーシャル以前にも、ヘンリー・ジョージ (*Progress and Poverty*) と J.S. ミル (*Principles of Political Economy*) によ

濟的進歩を引き起こすという累積過程を作り出すのである」とする舂谷 (1998, 136-137) と同一である。ただし、マーシャルのいう人間の進歩を生活基準の概念からのみ捉えることができるわけではない。

って使用されていた⁷⁾。たとえば、ミルの定義を見ておこう。

労働する人々が土地をもとに生活するか、あるいは賃金によって生活するかにかかわらず、彼らはこれまで常に習慣的な安楽基準によって設定された限界まで人口を増加させてきた。(Mill 1896, 174-175/訳二-172)

もし、賃金がこれまで非常に高く、労働者はその減少に耐えることができるのに、そのための障害が彼らの間の習慣的に高い安楽水準であったならば、食料価格の上昇あるいは彼らの生活状態における何らかの不利な変化は、二つの方法で作用するだろう。…(中略)…あるいはは人口に関する以前の習慣が安楽に関する以前の習慣よりもより強いことを証明するような場合は、永続的にその階級の生活水準を下げるかもしれない。(ibid., 210/訳二-284)

ミルは、安楽基準が賃金を規制すると考えた。彼らにとって、この安楽基準という概念は、家族を養っていくための必需品の基準であり、安楽基準の上昇・下落は人口の増減にかかわるも

のであった。言い換えれば、これは、階級の再生産を問題とした概念であった。

もちろん、安楽基準が人口の増減にかかわることは、マーシャルも認めているところである。だが、安楽基準は、換言すれば人口成長に対する外生的制約に過ぎず、それ自体の中には経済成長や貧困の解決方法が見いだせない。経済成長を第一目標とし、それによる貧困の解決を目的としたマーシャルは、まず安楽基準の概念を拒否する必要があった。マーシャルは、安楽基準の概念を次の様に批判する。

もし安楽基準の上昇が能率の上昇を伴って生じたとすれば、その時には一人口増加を伴おうがそうでなかろうが一それは人口に比べて相対的に国民分配分を増大し、しっかりとした基礎の上に実質賃金の上昇を確立するだろう。このように、労働者人口の10分の1の減少は、それぞれが以前と同じ分しか働かないならば、著しく賃金を上昇させることはないだろう。それゆえそれぞれの作業量が10分の1減少し、労働者の数が変わらないならば、一般に10分の1だけ賃金は下がるだろう。(Marshall 1961, 692-693/訳IV-253)

7) アメリカで出版されたヘンリー・ジョージの *Progress and Poverty* はイギリスでも大変売れ、影響力が大きかったようだ。オックスフォードでは *Progress and Poverty* と題した講義が行われ、マーシャルも1883年2月19、26日、3月5日の3回にわたって講義した。Stigler (1969)が解説しているように、マーシャルがこの講義を出版するように勧められた際に、ジョージとの意見の違いから論争になることを憂慮し、出版を辞退したという。なお、*Progress and Poverty* はロンドン、ニューヨークのいくつかの出版社から出版されている。ここで参照したのは1883年に出版された第4版であるが、序文に書いてあるように、以前の版とまったく同じであるようだ。ただし、訳本として参照したものの底本は、1898年に若干の訂正を伴って新版として出版されたものである。ここではマーシャルが自身の著作で使用する以前に読んでいたことを問題としているので、新版ではなく1883年を参照した次第である。

これは、あきらかにミルの賃金基金説を批判したものである。人口を抑制しても賃金の増加を望めるわけではなく、人口、賃金、安楽基準の三者の関係は、そのときの条件によって規定され、単純な関係にないことをマーシャルは指摘したのである。

このように安楽基準がマーシャルにとって、不十分な(多くの場合、無意味な)概念であったことは明らかであろう。安楽基準に換えて、マーシャルが採用したのが生活基準であったということを考えれば、この生活基準の概念が比較的后になるまでマーシャルの著作の中に登場しなかったということもわかるだろう。生活基準の概念は、古典派経済学の批判的検討の末、マーシャルが到達したものであったのだ。

2. 生活基準上昇の三要因

それでは、生活基準はどのようにして上昇させることができるのだろうか。マーシャルは教育の充実、賃金上昇、そして労働時間の短縮という三つの手段を考えていた。それぞれについて詳しく考察していこう。

教育の充実

教育は三つに分けることが可能である。一つは自己への教育であり、次に子弟への教育として家庭教育と学校教育に分けられる。

自己への教育とは、たとえば読書などによって教養を身につけることが含まれるが、そのために必要なのは時間的、精神的余裕である。長時間にわたる労働によって心身ともに疲れきった労働者が、酒や喧騒に喜びを求めがちなのは、マーシャルにとって理解できないことではなかった。「教育もなくただ疲れるような仕事の疲労からいくらか自由であることは、高い生活基準の必要な条件である」(*ibid.*, 720/訳 IV-291)と見ているように、労働時間の短縮が必要なのであった。

次に、家庭教育はマーシャルにとって特に重要視された要因であった。中でも、マーシャルは母親の教育的役割を大いに評価していたのである。「すべての資本のうちで最も価値のあるのは人間に投資された資本であり、その資本で最も貴重な部分は母親の世話と影響の結果」(*ibid.*, 564/訳 IV-83)であり、「母親が一日の大半家に居ないような、あるいは父親が子供たちが寝る前にはめったに家に帰ってこないような家からは、有能な労働者やよい市民は出てきそうにはない」(*ibid.*, 721/訳 IV-291)というほど、マーシャルは母親の教育効果を重要視していた。そのため少なくとも子供が幼少期にあるうちには、母親が家に居ることが必要となる。すなわち、その間は外での仕事を控えなければならぬのであるが、そのためには母親が教育の重要性を認識していることと、働かなくても生活していける経済的な余裕が必要である。

そして最後に学校教育である。マーシャルは高等教育が雇用者や職場の班長、そして一部の熟練工以外には直接役立つものではないと認めながらも、「よい教育は普通の労働者にさえも大きな間接的利益を与える」とし、「それは知的活動を刺激して、賢明な知的探求の習慣を養成し、日常の仕事においてより知的に、より素早く、そしてより頼もしくさせ、労働時間や労働時間外における生活の基調を高める」としている(*ibid.*, 211/訳 II-179-180)。貧しい家庭に生まれた子供が、最低限の教育を受けた段階ですぐに家計を支えるために仕事をする、という現実には珍しくなかった。したがってマーシャルは、よりよい教育を子供に与えようとするためには、「おそらく珍しくはないであろう無私の道徳的資質とあたたかい愛情に加えて、まだあまり一般的ではないある種の心の習性が必要」、すなわち「はっきりと将来を理解し、将来の出来事を現在のことと同じくらい重要なものとして認識する習性」(*ibid.*, 216-217/訳 II-185)が必要であると主張している。

以上のように、自己への教育は直接生活基準を上昇させ、他二つは子弟の生活基準を上昇させることが目的でありつつ、そのような行動を採ることが自己の生活基準上昇にもつながる。

賃金上昇

賃金の上昇は、直接生活基準を上昇させるわけではない。マーシャルは、安楽基準が賃金上昇や物質的進歩によって上昇することがある点を認めている(*ibid.*, 529-530/訳 IV-37)ので、賃金の上昇によって安楽基準が上昇する場合と一定の場合に分けて考えることができる(反対に賃金の上昇が安楽基準を低下させるとは考えにくい)。賃金が上昇し、安楽基準も上昇した場合、安楽基準の上昇が能率のための余暇の利用増大などによってもたらされるならば、ある程度生活基準を上昇させる可能性はある。次に、賃金が上昇し、安楽基準が一定の場合、それによって子供を増やすような場合は、生活基準に

与える影響は判断できない。それが教育費の増加や環境の良い居住空間への引越しなどに費やされると生活基準は上昇するだろうが、単に贅沢な暮らしを送るため、あるいは酒代へと当てられるなら、それは生活基準を低下させるだろう。マーシャルが、労働者の経済状態の改善が生活基準上昇の出発点になると考えていたことは、彼が最低賃金制度の導入に大いに賛成していたことにも現れている⁸⁾。

労働時間短縮

マーシャルにとって、労働時間の短縮は生活基準の上昇における重要な要素と考えられていた。

労働の時間、性質、作業環境、そして報酬が与えられる方法、これらが肉体の、精神の、および両方の大きな消耗の原因であり、低い生活水準をもたらすものである場合、また、能率にとっての必需品である余暇、休憩、休息が欠乏しているような場合、労働は社会全般から見て無駄であり、自分の馬や奴隷を過労や栄養不良のままにしておくことが、個々の資本家にとって無駄遣いであるのと同じようなものだ。このような場合、適度な労働時間の短縮は、国民分配を一時的にのみ減少させるが、上昇した生活基準が労働者の効率に十分な影響を及ぼすとすぐに、彼らの増大した活力、知性、そして性格の力が、短い時間で以前と同じくらいの仕事をするのを可能にするだろう。(ibid., 694/訳 IV-255)

マーシャルは「疲れた労働者の余暇の時間が、

必ずしも自己改善のために強くひきつけられないのは不思議なことだろうか」(Marshall 1873, 106/訳 200)と述べているように、長時間労働後の労働者が余暇を活用できないのは、必ずしも彼らのせいだけではないことを認め、労働時間短縮の必要性を強調した。さらに、「身体の活力が十分回復できる以上に強力で1日の仕事で消耗させられるような、そしてそれゆえ仕事で体系的に不規則であるようなあらゆる職業においては、家庭の喜びがパブの粗野な喜びに張り合うことができない」のであって、「彼の労苦は激しく、それゆえ彼の頭脳が鈍くなっていれば、飲酒、悪ふざけ、そして喧騒といった粗野な喜びのみを求めがちなのである」と認めている(ibid., 107/訳 201)。

このように、労働時間の短縮は生活基準上昇の条件ではあるが、同時に、余暇を持つことができてもそれを上手く利用することは非常に難しいことである、ということが言及されている。それでも労働時間の短縮は「社会全体が直接関心を持つべき」(Marshall 1961, 721/訳 IV-291)ことであり、また雇用主による理解が必要となるのである。

ここまでの議論で、企業者の態度が労働者の生活基準の改善のために、共通して必要であるということは明らかだろう。ところが、現状では、労働者はみずからの内面を改善するための時間や所得が決定的に不足している。そこで労働者の生活基準の改善には企業者の経済騎士道が重要な役割を果たすこととなる。だが、経済騎士道の普及のためには、世論による名誉法廷が必要であることは既に見た。つまり、そこには経済騎士道の普及→生活基準の改善→労働者の道徳的改善→名誉法廷の形成→経済騎士道の普及→・・・という相互依存的ループが形成されなければならない。

このように考えれば、これまでは別個の概念として捉えられることが多かったマーシャルの経済騎士道と生活基準の概念が、実はより密接に相互依存し合った概念であることがわかるだ

8) 政府によって定められる最低賃金法は、「その利益が非常に大きいので、仮病やその他悪用をもたらす恐れはあるものの、徐々に受け入れていくのがよい」としている。参考にすべき例がほとんどなく、また、最低賃金に値するような仕事をしていない人の数を把握する必要があると考え、導入には慎重な姿勢も見せていた(ibid., 715/訳 IV-283)。

ろう。

V. 考察—経済騎士道と生活基準のスパイラル

ここまでの考察で経済騎士道と生活基準の間には相補的な関係があることが明らかになった。経済騎士道の普及には労働者の道徳的改善が必要であり、逆に労働者の道徳的改善には企業者の公共心が必要である。この正のスパイラルがうまく働けば、経済成長が達成され、貧困の問題も解決する。逆にいうと、社会に貧困が存在するのは、負のスパイラルに陥っているか、経済成長のみで企業者や労働者の道徳的改善に繋がっていないためである。

マーシャルは1884年の「ロンドンの貧困者の居住をいかにすべきか」という論文においても労働者の問題に言及している。そこでは、市当局による貧困労働者の郊外移転補助という役割や鉄道の配慮などを提案している⁹⁾。その中で、マーシャルはロンドンの状況を以下のように捉えていた。

ロンドンでは世界中から人が集まるため、非常に多くの人口を抱えている。そのため、いかに住居を改善したところで、依然として新鮮な空気やレクリエーション等の環境整備のための空き地がないことには変わりがない。どのようにして過剰な人口を郊外に移転させるかという問題が一つのテーマとなっている。人口過剰のロンドンには希望を失った無気力なものも多く、そういった人々は、他の地域ならばより多くの賃金を得られるような仕事でも引き受けてしまう。したがって、「雇用主は賃金を節約するこ

とで高い地代を払い、労働者は減らされた賃金の中から高い地代を支払わなければならない」(Marshall 1884, 145/訳 289)という根本的な邪悪が存在することになるのである。

ここで興味深いのは、労働の種類を二種類に分けて分析している点である。一方は運送業、建築業、店員などといったロンドンで行われる必要のある職業であり、これらは労働の供給が需要に適合しているのであって、ロンドンの人口がもつ特殊な性格によって影響されてはいない。もう一方は、労働の供給がその需要ではなく、人口の性格によって決まる産業であり、そのような産業ではきわめて高い賃金が払われているか、きわめて低い賃金しか払われていないかのどちらかになる。その中で衣類製造業はきわめて低い賃金しか支払われていない特徴的な産業で、地代の高い場所で行われる経済的理由に反しているという(*ibid.*, 145-146/訳 290-292)。

この点からマーシャルは、貧困の原因を労働市場での需給の不均衡に求めていることがわかる。それは単に総量ではなく、性格の異なる個別の市場での需給ギャップに注目したものであった。産業が異なれば、それに付随する個別の労働市場の状況も異なるとし、労働者の質の差異に着目し、個別の市場間での労働の移動が必ずしもスムーズではないとする考え方は、部分均衡論上での議論を一貫させたマーシャルならではの考え方であろう。

しかし、現実の労働市場の上では、力学的経済理論のような形では均衡が成立しない。それは現実の市場には、合理的判断が可能な自律的・自立的存在である合理的経済人が存在しないからである。現実の人々(特に労働者)は、近視眼的で嫉妬深く不勉強で、自分の状態を改善するだけの時間がとれないほど疲れ果てている。このような状態にある人が、労働市場での需給ギャップの原因を考えられるはずもない。

さらに、ピグーが指摘するように、人々には「望遠能力が欠如」しており、現在の小さな利益

9) たとえば、「鉄道の株主の多くはロンドンの貧困者に対して何か実際的なことをすることを望んでいるが、どのようにすれば良いかわからない」ので、彼らに望むことは「管理職に貧困者を輸送することに関して寛大に振舞うように圧力をかけることである」といい、株主という立場を通じた労働者への心配りのようなところでとどまっている(Marshall 1884, 150/訳 296)。

のために将来の大きな利益を犠牲にする傾向がある(西澤 2007, 475)とする認識は、ケンブリッジの伝統でもあった。これは逆にいえば、この能力が何らかの改善を要していることを意味している。たとえば、マーシャルは、経済状態が改善され、道徳的に向上した労働者が、「貨幣を借りた人が利子をつけて返さなければならないように、人は自分の子供たちに、自分が受けたよりもより良い、より十分な教育を与える義務を負う」(*ibid.*, 117/訳 216, 強調は原著者)とする。

逆にいえば、マーシャルの理想とする労働者や経済騎士道を持った企業者の像が、自助独立、自立的・自律的という点で合理的経済人の概念と共通する点が少なくないことは、合理的経済人の仮定が単なる均衡論のための概念装置ではないことを示唆している。つまり、合理的経済人は、マーシャルが想定する理想的人格の一面面を表していると考えられる。力学的経済学がある意味実験室的な理想化された環境を前提としたものであるが、「理想化された」ものであるがゆえに、そこに想定されている経済主体はまた現実の主体の(別の意味での)理想化された姿である。西澤(*ibid.*, 12)は、このマーシャルの方法論について、自然科学と社会科学の方向性の同一性を認め、そこから将来に対する予測と導きが導き出させる点を強調していたと指摘する。合理的経済人の仮定の中には、与えられた情報をすべて使いこなし、適切な資源配分を行うことが仮定されている。もちろん、これが非現実的であることは確かだが、合理的な判断をする主体によって構成される社会が、経済的な理想を反映したものであるとすれば、現実の社会と理論上の世界の距離は現実の主体と理論の中の主体の距離として測られることになる。実際、マーシャルの経済学を継いで厚生経済学を構築したピグーは、理論上に構成される社会を現実の社会の理想として扱ったことでもこれは明らかだろう。

だが、他方でマーシャルの均衡は静学概念で

あり、それが成立すると他の条件が変化しない限りは安定する。そこには経済騎士道と生活基準の関係が示すようなスパイラル的發展は望むべくもない。マーシャル以後の経済学が教えるように、静学的体系を成長モデルに拡張するためには、均衡が成立したまま資本と人口および技術が成長するか、あるいは何らかの形で均衡を内包したモデルを立てるかするしかない。ハロッドやソローは前者のモデルを採用したし、後者を考えたのがヴィクセルであり、マーシャルであった。ただマーシャルは、ヴィクセルとは異なり実物経済や貨幣経済ではなく、経済主体の心の中に不均衡の原因を見出した。現実の経済主体は、非合理的、近視眼的かつ嫉妬深い存在でしかない。そのため自分たちの欲すべきもの、自分たちの評価すべきものを知らず、また自分たちへの需要がどこにあるかも知らない。他方、成功した企業者といえども、現在の社会の富に満足し、そのさらなる可能性を知らない。社会にはさらに改善される道徳の状態が存在し、そこにはいまだ満たされていない需要が存在する。だからこそ、マーシャルは、経済成長によって道徳的改善が起これ、その道徳的改善によってさらなる経済成長の余地があると考えたのである。

しかし、経済成長が必ず人々の道徳的な発展に結びつく確証はない。むしろ多くの場合は、貧富の差と道徳的墮落を伴うだろう。だが、それでもマーシャルは次のようにいう。

人間の生活状態は突然の改善はありえない。なぜなら人間自身は急速に変化することができないからである。しかし人類は、すべての人間が高貴な生活の機会を利用できるようになるという遠大な目標に向かって、着実に前進を続けなければならない。(Marshall, *ibid.*, 664-65/訳 III, 354-55)

マーシャルは、時間はかかるかもしれないが、経済的成長が労働者の生活基準を改善し、それ

が経済騎士道を育てるゆりかごととなり、さらに生活基準を改善する経済成長を促すというスパイラルが形成されることを期待したのであった。

VI. おわりに

本稿は有機的成長論における二つの中心概念である経済騎士道と生活基準に焦点を当て、特に人間の進歩という側面から両者の相互依存性について明らかにしてきた。経済騎士道は企業者の進歩であり、それは労働者を含めた社会の成員による世論によって育てられる。

他方、生活基準の上昇は労働者階級の進歩の源泉となる。この基準は、生活態度の改善を基礎とした労働者の利他心や自尊心の向上、及びそれに伴う労働生産性の上昇という点で、人間の進歩基準として使用された。本稿で明らかにしたのは、経済騎士道が、道徳的に成長した労働者らの世論によってはぐくまれ、労働者の道徳的改善が企業者の公的な役割の理解によって促進されるという、両概念の相互依存性であった。両概念の相互依存はさらなる経済成長を生み、人類社会を進歩させる。有機的成長は、経済成長と貧困問題の解決を経済学の第一目標としたマーシャルにとって、ある意味救貧法問題に対する彼自身の回答という性格も持った(Yamamoto and Egashira, *ibid.*)。

最後に、力学的経済学と経済生物学との関係の中で、問題を整理しておこう。力学的経済学は、古典力学に範をとり、実験室的な条件を設定する。合理的経済人を仮定し、無時間的であり、(マーシャルの期間分析は単なる便宜上の分類であり時間的性格は皆無である)、そのため関係性の説明はあるが因果関係の説明はない。それは、技術と効用を所与とした静学的均衡を前提としている。

これに対して、経済生物学は、生物進化を範にとり、現実の社会の歴史的研究により近い立場を採る(歴史研究そのものではない)。そこに登場する主体は、経済騎士道や道徳的改善を指

さなければならぬ現実の主体である。歴史的時間が存在するため、有機的成長論のように因果関係の説明が中心となる。技術や人の心の進歩を前提とするため、本質的に不均衡である。

このように整理してくるとこれまで漠然としていたマーシャルの経済生物学の姿が現れてくるだろう。マーシャル自身は完成させることはなかった経済生物学だが、その部品は力学的経済学と対照をなして各所に配置されていた。本稿では経済騎士道と生活基準という力学的経済学には取り込むことができない二つの概念の関係を明らかにすることにより、その一端を明らかにした。マーシャルの著作の中から、彼が最終的に目指した体系を発掘する作業は、このような一つ一つの概念の洗い出しと、既存の体系の中での位置づけのみによって行われるのである。

参考文献

- Blaug, M. 1968. *Economic theory in retrospect*, Revised ed. Homewood, R. D. Irwin. 杉原四郎, 宮崎厚一訳『経済理論の歴史(中)マルクスとマーシャル』東洋経済新報社, 1968.
- Coats, A.W. 1990. "Marshall and ethics", in *Alfred Marshall in Retrospect*, edited by Rita McWilliams Tullberg, Edward Elgar.
- George, H. 1883. *Progress and Poverty*, 4th ed. New York, J.W. Lovell. 山崎義三郎訳『進歩と貧困』日本経済評論社, 1991.
- Gerbier, E. 2006. "Economic chivalry," in T. Raffaelli *et al.* (ed.) *The Elgar Companion to Alfred Marshall*, London Edward Elgar.
- Guillebaud, C. W. 1942. "The evolution of Marshall's principles of economics", *The Economic Journal*, Vol. 52, No. 208: 330-349. Reprinted in Wood ed. 1982, Vol. II: 166-185.
- Harrison, R. 1963. "Two early articles by Alfred Marshall", *The Economic Journal*, Vol.73, No.291: 422-430. Reprinted in Wood ed. 1982, Vol. IV: 119-130.

- Keynes, J. M. 1926. *Official papers by Alfred Marshall*, London, Macmillan.
- , 1936. *The general theory of employment, interest and money*, London, Macmillan. 塩野谷祐一訳『雇用・利子および雇用の一般理論』東洋経済新報社, 1995.
- Levitt, T. 1976. "Alfred Marshall: Victorian relevance for modern economics", *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 90, No. 3: 425-443. Reprinted in Wood ed. 1982, Vol. I: 421-441.
- Marshall, A. 1873. "The future of the working classes", in *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou, London, Macmillan, 1925.
- , 1884. "Where to house the London poor", in Pigou, 1925.
- , 1885a. "The present position of Economics", in Pigou, 1925.
- , 1885b. "How far do remediable causes influence prejudicially (a) the continuity of employment, (b) the rates of wages?", in *Report of proceedings and papers on the industrial remuneration conference*, edited by C. W. Dike, London, Cassel.
- , 1890. "Some aspects of competition", in Pigou, 1925.
- , 1898. "Distribution and Exchange", *The Economic Journal*, Vol. 8, No. 29: 37-59.
- , 1907. "Social possibility of economic chivalry", in Pigou, 1925.
- , 1920. *The Principles of Economics*, 8th ed. London, Macmillan. 永澤越郎訳『経済学原理』岩波ブックセンター信山社, 1985.
- , 1961. *The Principles of Economics*, 9th ed. London, Macmillan, Vol. I. 馬場啓之助訳『経済学原理』東洋経済新報社, 1965-1967.
- Marshall, A. & M. P. 1879. *The Economics of Industry*, Bristol, Thoemmes Press (first ed. reprint).
- , 1884. *The Economics of Industry*, 2nd ed. London, Macmillan. 橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部, 1985.
- Mill, J. S. 1896. *Principles of Political Economy*, People's ed. London, Longmans, Green. 末永茂喜訳『経済学原理』岩波書店, 1959-1963.
- Pigou, A. C. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*, London, Macmillan. 永澤越郎訳『マーシャル経済論文集』岩波ブックサービスセンター, 1991.
- Raffaelli, T. 2003. *Marshall's Evolutionary Economics*, London, Routledge.
- Stigler, G. J. 1969. "Alfred Marshall's lectures on progress and poverty", *The journal of Law and Economics*, Vol. XII (1): 181-226. Reprinted in Wood ed. 1982, Vol. IV: 146-192.
- Nakano, T. 2007. "Alfred Marshall's economic nationalism", *Nations and Nationalism*, 13(1): 57-76.
- Thomas, B. 1991. "Alfred Marshall on economic biology", *Review of Political Economy*, 3.1: 1-14.
- Tullberg, R. W. 1975. "Marshall's "Tendency to Socialism"", *History of Political Economy*, Vol. 7, No. 1: 75-111. Reprinted in Wood ed. 1982, Vol. I: 374-408.
- Whitaker, J. K. 1990. *The early economic writings of Alfred Marshall 1867-1890*, Vol. II, London, Macmillan.
- , 1990. "What happened to the second volume of principles?", *Centenary essays on Alfred Marshall*, edited by J. K. Whitaker, Cambridge; New York, Cambridge University Press. 橋本昭一監訳『マーシャル経済学の体系』ミネルヴァ書房, 1997.
- , 1996. *The correspondence of Alfred Marshall, Economist*, Cambridge; New York, Cambridge University Press, Vols. III.
- Wood, J. C. ed. 1982. *Alfred Marshall: critical assessments*, London, Croom Helm, Vol. I-IV.
- Yamamoto, K. and S. Egashira 2012. "Marshall's Theory of Organic Growth", *European Journal of Economic Thought*, forthcoming.
- 斧田好雄, 1971. 「マーシャルの経済騎士道について」『文化紀要』(弘前大学教養部)5: 1-19.
- , 1981. 「マーシャルと社会主義—初期の文献を中

- 心として一』『文化紀要』（弘前大学教養部）15: 57-86.
- 小沼宗一, 1999. 「リカードウ, ミル, そしてマーシャル—経済社会像を中心にして—」『東北学院大学論集』142: 77-96.
- 西岡幹雄, 1997. 『マーシャル研究』晃洋書房.
- 西澤保, 2007. 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店.
- 舩谷謙二, 1998. 「A. マーシャル『経済学原理』における連続性の認識と方法—労働階級の倫理的成長と経済的成長の相互性を通じて—」『東北学院大学論集』137: 123-143.
- 森茂也, 1999. 「マーシャル「経済騎士道の社会的可能性」と現代」『南山経済研究』（南山大学）14（1・2）: 17-37.
- 西沢保, 2007. 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店.
- 坂口正志, 1990. 「有機的成長論」橋本昭一編 1990, 第7章.
- 櫻井克彦, 2004. 「社会的責任論の源流と A. マーシャルの経済的騎士道論」『創価経営論集』28: 15-25.
- 馬場啓之助, 1961. 『マーシャル—近代経済学の創立者—』勁草書房.
- 橋本昭一編, 1990. 『マーシャル経済学』ミネルヴァ書房.
- 姫野順一, 1990. 「功利主義から新自由主義へ」越智保則他編『社会経済思想の展開』ミネルヴァ書房, 第6章.
- 岩下伸朗, 1992. 「マーシャル分配論についての一考察—「進歩」の視座との関連で—」『福岡女学院大学紀要』2: 171-194.
- , 2004. 「マーシャル経済学の進歩思想」小柳公洋・岡村東洋光編『イギリス経済思想史』ナカニシヤ出版, 第8章.
- 近藤真司, 1990. 「生活基準の経済学」橋本昭一編 1990, 第3章.
- , 1997. 「マーシャル経済学における進歩と自由」田中眞晴編『自由主義経済思想の比較研究』名古屋大学出版会, 第6章.